

---

# 僕の名前のヒミツ

K I D

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

僕の名前のヒミツ

### 【著者名】

Z9907H

### 【作者名】

KID

### 【あらすじ】

ある日、僕は父さんに訊いてみた。『どうして僕の名前は、皆とは少し違う名前なの?』と・・・。その問い合わせを聞いた父さんは、僕にある話を聞かせてくれた。ある小さな少年の話を・・・。学校に行く途中で、思いついた話です。興味があつたら、見てください。

ある晴れた日。

僕は父さんと河原に来ていた。  
僕がそこに呼んだのである。

「それで？ なんだ、訊きたい事つて？」

父さんが先に訊いてきたから、僕は言いたい事を言った。  
「どうして僕の名前は、皆とは少し違う名前なの？」と。  
父さんはその問い掛けに驚いたような顔をしていた。

「友達に言われたのか・・・？」  
訊かれたけど答えない・・・。  
確かに、友達にそう言われた。

別に僕はこの名前は嫌いじゃない・・・。  
むしろ、気に入っている方だ・・・。

だけど、毎回毎回同じ事を言われ続けてたら、流石にこの名前が嫌  
になる。

それが怖かった・・・。

自分の名前を自分で嫌うのが、僕は怖かった。

父さんも、それは分かつていたらしい。  
だからこれ以上何も言わなかつたし、何も訊かなかつた。  
代わりに言つたのは・・・。

「なあ・・・。父さんがこれから、お前に話してあげようか?」

「何を?」

「探偵の話だよ」

「好きだね・・・。僕も好きだけど」

「丁度お前くらこの小さな探偵の話だよ」

「えつ?」

僕は耳を疑つた。

僕は今小学1年生だ。

僕と同じ年の探偵なんて、あり得ない・・・。  
作り話に決まってる・・・。  
だけど父さんは・・・。

「これは実話だぞ」と言つた。

こつじて、父さんの話は始まったのだ。

まず最初に話してくれたのは、主人公の『S』といつ高校生探偵について。

その『S』という名前が、途中の場面の話で『S』に変わった。  
なんでも、謎の組織に飲まされた薬で、体が縮んだんだって・・・。

「その少年『S』 =『S』は、知り合いの家にその日の出来事を全て話した。そして事情が全て分かつた時に『S』の一番愛していた女性『R』がその知り合いの家に遊びに来てしまったんだ・・・」

「えーっ！ それ、大変じやんか！」

僕は半分オーバーリアクションとも取れる反応をして、その話の続きを聞き直した。

その後の話がまた凄い・・・。

その『S』の知り合いは『R』に對して『この子をしばらぐの間預かってくれ』って、頼んだんだって・・・。

理由は『Rの父親が探偵だつたから』なんて、本当によくある流れ・・・。

でも、僕は納得できなかつたよ・・・。

Rに『C=S』だつて、話さなかつた事が・・・。

「どうして話さなかつたんだよ！？ その『C』っていう人・・・。

一番大好きな人だつたのに・・・」

「話したくて、話せなかつたんだよ・・・。一步間違えたら、彼女も殺されるかもしぬなかつたから・・・」

「だからつて・・・」

まだ納得できなかつた・・・。

大切な人を、嘘で騙している事が・・・。

「その後『C』は何度も色々な事件を解決した。全部『R』のお父さんがやつた事にして・・・。その内に、逆戻りした小学校で出来た仲間や、西の高校生探偵・・・。平成のアルセーヌ・ルパンと呼ばれ続けた怪盗にも出会つた。だけど・・・、組織は中々見つからなくて、月日だけが流れた・・・」

「じゃあ……『C』はどうなったの……？」

僕がそう訊くと、父さんはしばらく黙り込んだ。  
一瞬凄く心配だったのだけど……。

「『C』が組織を発見したのは、もうじき一年になる、という頃だ  
った……。『C』はその間に、西の高校生探偵と呼ばれた『F』  
と、大怪盗の『K』と共に、組織を追い掛けた  
「なんで、泥棒が仲間になってるの？」  
最初に聞いて浮かんだ疑問だ。

「その泥棒も『C』と同じく、組織を憎んでたんだ。自分の父親を  
殺されたから……」

「それで仲間に……」

「うん……。だけど、最初は失敗した……。敵の策略も全然考  
えなかつたから……」  
つまり、甘く見過ぎたってことか……。

「それで？ それで？」

「……。……。……。『R』に……『S』だとバレた……

「

（えつ？……）

ずっと隠していた人間に、正体がバレた……。  
という事は、ずっと『C』が騙していたのも……。

「『R』は『C』にいつ言った……」

びひしていつも、一人で抱え込むの？

みんながどんなに心配してるか……。  
少しは考えてよっ！？

それに……私は前に言つたじやない……。

『周りを危険に晒すなんて……、そんなの探偵のすることじやないよ！』

て……。

「その時に、初めて『C』は知つたんだ……。一人で抱え込んでたら、何も始まらない……。何も終わらなくて、何も解決できないつて……。小さくなつて……、初めて知ることが出来たつてね……」

一人で抱え込むな……！

僕の父さんの口癖だつた……。

「……。その後は……。『C』はどうなつちやつたの？ 死んだの？ それとも、子供のままだつたの？」

「いいや・・・。その後は、仲間の一人が元に戻す薬を作ってくれて、無事、元の17歳の高校生に戻れた・・・。ただ俺が言いたいのは、一人では何も・・・」

「うまくはいかない・・・。だから、自分の周りに頼つてほしい・・・でしょ？」

先が読めたから、父さんよりも先に言った。  
申し訳ないけど・・・。

「お前な・・・」  
「僕、馬鹿にされたんだ・・・。名前・・・」  
「・・・」  
「」

一人で抱え込んでちゃいけない・・・。  
だから言つたよ。

名前を訊いた理由・・・。

「ねえ・・・、父さん・・・」  
「うん？」

僕は迷つた・・・。  
だけど、訊いた・・・。

「父さんは・・・、母さんを騙してて、辛かつた・・・？」

しばらく静かになった。

川原で白い綿毛のタンポポが、次々に空に舞い上がる。  
その中で、父さんは言った。

「いつ気がついた？　この話が父さんの・・・」

「最初から。皆の名前がアルファベットの順番で、すぐに分かっ  
たよ。皆の名前を言いたくないんだって事も・・・」

「流石・・・。未来の名探偵・・・」

父さんが苦笑いを浮かべた。

「ねえ？　辛かつたの？」

「そりや、辛いよ・・・。というより、悲しかつたし、自分が憎た  
らしく感じた。今まで母さんを騙した事なかつたからな・・・」

「もう騙さない？」

「ああ・・・。それだけじゃない・・・。もう離れないし、もう危  
険な目に合わせない・・・」

「おっ！　確かに今言つたな・・・。  
それなら・・・。

「じゃあ、仲直りしてよ。知つてるんだよ。朝口喧嘩が大喧嘩にな  
つたの」

「・・・。いつ？・・・。」

「今日の朝。僕が朝起きたら、家の柱が2本折れてた・・・。この  
間コンクリートで壁直したばつかりなのに・・・。夫婦は直らない  
の？」

「・・・。」

父さんが渋い顔をしたまま、時計を見た。  
時刻はもうすぐ12時……。

「なあ。今日は仲直りも兼ねて、外で食べよつか?」

「えつ? いいの!? やつた」

「じゃあ・・・、家に誰が先に着くか、競争だな」と言つや否や、父さんは僕を置いて走り出した。

タンポポの綿毛に紛れながら……。

「えつ? ちよ、ちよつと待つてよ……」

「ほり、早く来いよ!」

「待つててば!」

僕は半分笑いながら、父さんと同じ様に走り出した。

もつ僕は、自分の名前を皆とは違う名前だなんて思わない……。  
嫌いな名前とも思わない……。

むしろ『こんな事があつたからなんだ』って、自慢できる。

『一番大好きな名前だ』って、胸を張つて言える。

あの話を聞いて、僕は初めて分かつたんだ。

僕の名前のヒミツが……。

だつて僕の名前は……。

『藤原ナシ』って、三つだから・・・。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとっています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n9907h/>

---

僕の名前のヒミツ

2011年11月12日01時40分発行